

魔王の三男だけど、備考欄に

『悪役令嬢の兄（尻拭い）』って書いてある？ 2

サリエル

悪役令嬢である妹ディエンヌの
尻拭いに奔走する魔王の三男。
ぱつちやりもちもちな
体型だったはずだが……？

人物紹介

レオンハルト

サリエルの義兄で婚約者。
次期魔王候補で、
サリエルのことを
溺愛して止まない。



ディエンヌ

サリエルの異父妹で、
高飛車と我儘に拍車がかかるた
惡辣な悪役令嬢。

マルチエロ
レオンハルトの従兄弟で、
ディエンヌの婚約者。
柔軟な笑みを浮かべる腹黒策士。



ファウスト

バッキヤス公爵家の子息。
サリエルにとても懐いている
ストイックな青年。



アリストイア

優げな侯爵令嬢で、乙女ゲーム
『ロンドイヌス学園』どんな悪魔
と恋しからう?』のヒロイン。



目次

魔王の三男だけど、備考欄に

『悪役令嬢の兄（尻拭い）』って書いてある？ 2

番外編集 みんなの気持ち

魔王の三男だけど、備考欄に

『悪役令嬢の兄（尻拭い）』って書いてある？2

「ぼくはサリエル・ドラベチカ。もつちりぼつちやり我が儘ボディは相変わらずの、魔王の三男である。

六歳のとき、ぼくは妹のディエンヌの魔法で空に飛ばされて意識を失った。そして目が覚めたら、なんとか『備考欄』が見えるようになっていたんだ!?

ぼくの備考欄には『悪役令嬢の兄(尻拭い)』って書いてあって……優しいお友達や、ぼくのここ、婚約者でもあるレオンハルト兄上に助けてもらいながら、ぼくははなはだ不本意ではあるが悪役令嬢らしき妹ディエンヌの尻拭いを絶賛実施中なのであった。

それで、今年の三月に十二歳になつたぼくは、ロンディウヌス学園の入学資格を得て、本日四月一日が、いよいよロンディウヌス学園の入学式なのであるう。

昨日からそわそわしてよく眠れなかつた……こともなく、ぐつすり寝た。けど、やつぱりちょっと早起きしてしまつた。

だって新しい生活がはじまるんだもの、ドキドキのワクワクでしょ。

小鳥のモチーフが彫刻されたクローゼットの前に、学園の制服一式がハンガーにかかっている。

その白さは目にまぶしく、燐然と輝いている。そう、制服は白なのだ。

ぼくはコロリーンと転がつてベッドを降りると、洗面や整髪などの身支度を整え、満を持して制服に袖を通した。

学園の白い制服は、襟元に緑色の縁取りがある。学年によって色が違うらしく、一学年上のラー・ディンの制服は青い縁取りだった。

『攻略対象のイメージカラーが採用されているんだ。瞳の色が、ラーディンは青、マルチエロは緑だから、来年はシユナイツの瞳の色の赤が襟の色になると思うよ』

ぼくの口を使って言つたのは、インナーだ。

インナーというのは、ぼくの中にいる別人格で、いつの間にかぼくの中にいた謎人物である。

六歳の『ディエンヌの、ぼく殺人未遂事件』のあと、ぼくの中にインナーがいることに気づいたんだ。長く一緒にいるから、もうぼくの一部みたいなものだね。

そのインナーがつい最近、ぼくがいるこの世界は、インナーが前世でプレイしていた乙女ゲームの世界観と酷似していると言い出した。ぼくは『ふーん、そうなんだあ』って思つている。

『ファウストとエドガーはイメージカラーにならないのですか?』

『攻略対象が同じ学年にいる場合は、登場が早いほうの色になる』

とても緻密に設定されているようだ。ふーん、難しそうなゲームだね。

そうそうゲームといえば、今日までの間に、インナーにゲーム内容を思い出せるだけ思い出してもらつて対策を練つたのだ。

ぼくの妹である悪辣なディエンヌは、ゲームでは悪役令嬢である。その末路には、処刑ルート以外に、国外追放ルート、修道院で矯正ルートなどがあるらしい。

どのルートに行つても、ディエンヌは主人公をいじめたとして断罪されるが、その悪さの度合いによって、処刑、国外追放、修道院にて矯正、のいずれかのルートに進むようだ。主人公をいじめるのは決定事項みたいだね。

主人公が死んだらバッドエンドで、ディエンヌは処刑ルート確定。でも妹が処刑になつたら、兄上が魔王になるときの障害になるかもしないでしょ？だからとにかくぼくは、バッドエンドを阻止したいわけ。

主人公が死にさえしなければ処刑にはならないと思うので、つまり主人公を守り切れたらぼくの勝ちなのだつ。たぶん。

あと、ディエンヌが学園に行かないという一番楽なルートでも、勝ちであるう。

そして、主人公が兄上と恋愛をはじめないために、決して主人公を兄上と会わせてはいけない。絶対絶対、運命の出会いを阻止するのだ!!

『小姑だな。うぜえ、小姑』

「いいえ、ぼくは腐つても兄上の婚約者ですから、当然の権利ですう」

インナーにからかわれたけど、ぼくは猛反発する。兄上は、ぼくの兄上なお！

そうこうしつつ制服に袖を通したぼくは、姿見の前に立つた。制服の下に着るシャツは自由なので、襟にレースの飾りがついている白いシャツを選んだ。

鏡を見ながらぶつとい指で襟やスカーフタイの形を整え、赤い宝石のブローチを着ける。この宝石は兄上からのプレゼントで、すつごく強い威力の防御魔法がこめられているのだ。

そして『白い制服の素敵なぼく』が爆誕したつ。むふーん！

蛍光レッドの髪が今日も艶やかで、いい感じ。

……いや、わかっている、みなまで言うな。白い制服に赤いトサカで二ワトリ形状に拍車がかかつているということは。

ううむ、と鏡を睨んでいた、そのとき。コンコンと窓をつつく音がした。
はあつ、来たつ！ やつが来るのはわかっていた。

今日は入学式だけでなく、ぼくとやつの全面対決の日でもある。

臨戦態勢のぼくは、カーテンをシャツと開ける。するとそこには、当然ここにおりますけど、なにか？ というようなふてぶてしい顔つきのズメガズスがいた。

ズメガズスは、清らかな赤子をさらつて育てるという迷惑な鳥の魔獣。体長は一メートルほどで、まるいフォルムで、姿はインナー的に言うとズメだ。

毎年、春になるとぼくのところへやってきて、なんでかぼくをさらおうとする。ぼくはいつも、ズメガズスの口車に乗つてしまふけどお……

しかし今年のぼくは去年までのぼややんなぼくとは違うぞ!!

なんていつたつて学生になる、つまりは大人の仲間入りなんだからねつ!!

ぼくはスパンと窓を開け、颯爽とズメガズスに言い放つた。

「どうです、スズメガズスうう！ 学園の制服を優雅に着こなしたぼくを見て、驚いたでしょ？ 身長だつてもうスズメガズスより大きい素敵な大人なのですから、いい加減ぼくのことは諦めてくださいねっ」

そう、ゲンと身長が伸びたのだ。去年から、五センチくらい……

でもでも、すつごい成長スピードでしょ？ スズメガズスより頭ひとつ分は大きいのだから。

……横幅は、変わりなしです。ええ、安定のぼつちやりんですけど、なにか？

「おお、なんと立派な姿だ。あの子がこんなに大きくなるなんて、妻にも見せてやりたい」

するとスズメガズスは、目を潤ませてそう言った。やつは会話できる魔獸なのだ。

「つ、妻？ 奥さんがいるの？」

「ああ、しかし妻は病弱で、ここまで飛んでこられないのだ。でもこの雄姿を一目だけでも妻に見せてやりたいなあ。もしかしたら妻は、来年まで生きられぬかもしれないなあ」

「そ、そんなの？」

長年お付き合いしているスズメガズスに、少し同情してしまう。

「でもぼくは、もうスズメガズスよりも大きいよ。運べないでしょ？」

「私は力持ちなのだ、安心せいつ、さあ乗れ。さあ、さあ」

急に元気になつたかと思うと、スズメガズスは意氣揚々と白い布を広げる。

ぼくがいぶかしげにその様子を見ていると……背後からキィヒドアの開く音がした。

「……サリエル様？」

振り向くと、扉の隙間からぼくの専属侍女エリンが、ジト目でこちらを見ていた。の、乗りますんよ。知っていますよ、これがスズメガズスの作戦だということは。

そう思つて、ぼくはエリンに首を横に振つてみせる。

「けつ、人情に訴える作戦も失敗したあ。覚えてろよおおおお!!」

するとスズメガズスは、白い布をサッと回収して飛び去つた。

あああああ、またスズメガズスにしてやられるところだつたあ！！ いえ、あんな見え透いた罠

には引っかかりませんよ。大丈夫に決まつていいじゃあないですか。

「またスズメガズスの罠にかかりそうになつて……昨年は来なかつたから安心しておりましたのに」

ぼくは口をきゅうと引き結ぶ。ごめんよ、エリン。実は昨年も來たんだ。

学園に入学するまで、貴族のお子様は魔王城にて月一で開催される子供会に参加する。

やつは昨年の子供会会場の庭に降り立つたのだ。お友達のひとりであるエドガーがスズメガズス

を見て『清らかな魂が大好物なのです』と叫んだ。

ああ、魔王の三男が清らか認定だつて、バレちゃつたあ！

のみならず、毎年スズメガズスがぼくを迎えて来る这件事をお友達たちに知られてしま

いいい……ぼくは史上最悪の屈辱を受けたのであつた。

その場には兄上の従者であり護衛のミケージヤもいたのだけど、おそらく彼はぼくのプライドのために、エリンに報告しないでいてくれたのだろう。

でも、今年も来ちゃった。昨年の気遣いがふいになつてしまつた。ミケージャ、ごめんよ。

「エリン、ぼくがスズメガススごときの罠にかかるわけないです。もう一人前の大人なのですから」

「まあ、サリエル様。とつても凜々しいお姿で、エリンは感動いたしました」

大きな耳をピルピル震わせ涙ぐむエリンを見られて大満足だ。

さあ、この姿を兄上に見せに行こう。

★★★★★

ピンク色の花びらがひらひらと降る桜の木の下。

制服に身を包んだぼくは、ひとり物憂げに兄上を待つていて。

丘を覆う草原が緑に輝き、桜のピンクと、ぼくの制服の白が、鮮やかなコントラストを描いていた。

ぼくが手を差し出すと、丸い指に小さな花びらがそつと乗る。その花びらを掴もうとするけれど、ひらりと逃げてしまった。ぼくは、まるで手を所在なげにもみもみして……。

そんな感じでメルヘンに浸つてはいるが、エリンがそばにいるのでひとりではない。

兄上を待つ健気なぼく、というシチュエーションなの！

それはともかく、なんで兄上の屋敷の敷地内に桜があるのかというと、ぼくが植えたからだ。植

えたというか厳密には、以前ももんもを生やしたのと同じ要領で、ポンポンと地面を叩いて大地にお願いしたのだ。

だつてえ、インナーの脳内イメージにある『新入生が桜の木の下でにつこり』っていう光景を演出したかつたんだもおん。

インナー的に言うと、年齢的に、ぼくはこれから中高一貫の学園に入る、みたいな感じらしい。

中高一貫という言葉はあまりピンとこないけど、四月までに満十二歳になつた子が六年間学ぶ学校つてことみたいだから、まあ合つてているね。

『給食のおばちゃんが、につこり……』

そう言つて、インナーが脳内で白い割烹着の^{わっぱつき}おばちゃんを見せてくる。インナーはたまにぼくを給食のおばちゃんと言つてイジるんだつ。もう、インナー、雰囲気を壊さないでっ！！

というわけで、丘の上で待つぼくの頭上には、薄ピンクの花がワツと咲いていて、いい感じに花びらが舞い落ちていた。

ひらひらと舞う花びらの軌道は、インナーがぼくの脳内で見させてくれたものと同じ。不規則で、だからこそ華やかで、^{はかな}優^{ゆう}げだ。うーん、ロマンティック。

ぼくはにこにこして桜の花びらを見ていた。

すると、遠くのほうから兄上の乗る馬のひづめの音が聞こえてきた。
実は、せつかくのいいロケーションかつ、ぼくの入学ということで、この光景を絵に残そうということになつたのだ。

この世界には写真という、インナーのいた世界の優れものグッズはないから、絵師に残しておきたい情景を描いてもらうしかない。

ふたり一緒に描いてもらうので、兄上もそれなりにおめかしをしている。黒くて大きな馬に乗り、豪華な服装でバツチリ決めた髪型の兄上は、言うまでもなく立派で格好良い。

十七歳になつた兄上は、魔王と変わらないくらい体格が大きくなつて威厳たっぷりだ。耳の後ろからのびる三重に巻いたツノはとてもたくましい。長くて艶やかな深みのある藍色の髪は毛先に向かつてゆるくウェーブして、大人の色気を醸し出している。

夜会などで着るきらびやかな黒い礼服は、兄上の体躯^{たいく}を引き締めて見せていて、その上から黒のマントを羽織る姿はもう、ゴージャスアンドエレガント。もう兄上が魔王でいいと思う。そのような出で立ちだつた。

いつもは厳しさをたたえる切れ長の目は、ぼくを見ると柔らかくなる。兄上は優しく微笑んだ。胸がきゅうううとなるう!!

この頃はインナーがきゅうううなのか、ぼくの心臓がきゅうううなのか、よくわかりません。というかもう、もつちりのぼくはどうでもいいから、今の兄上の顔を絵師様描いてえ!! 即座に、超速で、今すぐ描いてえ!!

「待たせたな、サリュ」
兄上が馬から降りたので、ぼくはプロと抱きついた。

ぼくと兄上の身長差は、かなりある。兄上は一メートル近い高身長で、ぼくは今、一二〇センチ

くらい。まだ兄上のウエストに手を回すのがやつとだけど、一応これが挨拶だ。

「何度見ても白い制服のサリュは愛らしいなあ……見るたびに惚れ直してしまうよ」

兄上はいつもぼくに手放しの賛辞を贈つてくれるので、照れてしまう。

「なあサリュ。花びらが舞つてとても美しいが、この木はサクラーと言つたか?」

「はい。サクラーは花が散つたあとに実をつけます。その実も甘酸っぱくて美味しいですよ」

インナーが見ってくれた桜は、ソメイヨシノという品種で実はならない。

でもせつかく桜を生み出すのならサクランボも食べたいので、大地には実のなる桜を想像しながらお願いした。だからたぶん、夏前には美味しいサクランボが食べられる……はず!

「そうか。また美味しい果物がひとつ増えるのだな。そしてなにより、花が美しい。まるでサリュのように、小さくて可憐で愛らしいではないか」

桜にたどえられるなんて、面はゆい。そう思いつつ恥じらうが、ぼくがモジモジしても、兄上の腰にお腹がプロプロ当たるだけなのだつた。むうう。

「レオンハルト様、早く絵師に略画を描いてもらわないと、入学式に遅れてしまします」

ミケージャの助言に、兄上はうなずいた。絵師はミケージャの馬に一緒に乗つてきたみたい。

兄上は軽々とぼくを抱き上げて鞍の前のほうに座らせ、ぼくの後ろに颯爽^{さっそう}とまたがつた。

桜の木の下で、黒馬に乗つた兄上とぼく。というシチュエーションで描いてもらうのだ。

絵師がスケッチを紙にさらさらあと描いていく。

これまで絵を描いてもらうという経験はなかつたので緊張してしまった。張り切つて胸を張ろうと

すると腹が突き出て、唇もむむうつとへの字に引き結んでしまった。

「サリエル様、もう少し表情を柔らかくお願ひします。笑顔、笑顔で……」

絵師に言われて笑うが、なんか違う。いつものように笑おうと意識すると、なんだかどんどん変な顔になっていく。自分がどんな顔をしていたのかわからない。顔面崩壊寸前だあ……

「サリュ、コチヨコチヨしてやろうか？」

兄上が耳元で囁く。その低くてまるやかな美声が鼓膜をくすぐつて、耳がこそばゆい。

「やめてください、兄上！ 顔面崩壊が増大します」

「ああ、もつと頻繁に絵師を呼んで、サリュを描いてもらえば良かつたなあ。赤子のサリュの肖像は本当に残すべきだった。そういう頭が働かなかつたのは、痛恨の極みだ」

そんなことを言いながら兄上が顔をしかめると、絵師に『顔が怖いですよ、リラックスしてくださいさあい』と注意された。ぼくらはふたりでエヘリと笑つた。

「サリュは、ほがらかな明るい笑顔が可愛いのだ。絵には、そういうサリュを残してほしいな」

クスクス笑いながら兄上がそう言うから、ぼくの顔はどんどん熱くなる。

やーめーてー!! 兄上の裏め殺し攻撃が、ぼくの顔面崩壊を加速させるう!!

嬉しいは、嬉しいのだけど。そう思いながら、はにかんで兄上を見上げて笑うと……

「はい、オーケーです。いい絵が描けそうですよお」

絵師がそう言つて終わりになった。大まかに描いたあとは、絵師にお任せになるようだ。あとは絵の出来上がりを待つばかり。どんな絵になるのか、今から楽しみだね。

「では、サリュ。玄関前に馬車を待たせてあるから、そこまで一緒に乗つていくぞ。しつかり鞍の手摺りにつかまつていなさい」

兄上はぼくを馬に乗せたまま、桜の木を黒馬で一周して、それから丘を下つていった。

ぼくは六歳のときに落馬して以来、ひとりで馬に乗るのを諦めていたけど、やつぱり馬に乗るのは楽しい。自分で馬を操つて、風を感じて走る格好良さに憧れてしまうね。

でもこうして兄上とふたり乗りするのも楽しい。なんだか兄上との距離が近いからか、心がほのかに温まつてドキドキしちゃう。

ただ……兄上の黒馬がぼくらの重量に耐えられるのかが心配だつた。

幸せな時間はすぐに終わり、ぼくと兄上は屋敷の玄関までやつてきた。並走してきたミケージャは馬から降りると、手綱を厩舎の職員に預ける。

兄上の黒馬は、ぼくのようなぱつちやりが乗つてもおとなしくしていた。

「重かったでしょう？ お疲れ様。次もまた、乗せてくださいね」

だから、ありがとうという気持ちをこめて馬の首をナデナデしてから、馬から降りる。厩務員に連れていかれる黒馬に手を振つて見送つた。

そして学園に行くための馬車を目にして驚愕した。だつて、とても立派なのだもの。

大きさも横幅も普通サイズの二倍くらいある。色は黒で艶めいたコーティングもされていて、扉にはドラベチカ家の紋章がでかでかついていた。あ、車のステップに金色で羽模様の装飾が施されている。結婚披露のパレードで見るような豪華仕様の王族の馬車だ。

「さあ、サリュ。馬車に乗つて」

ミケージャが馬車の扉を開けてくれて、兄上がぼくに手を差し出す。

これはエスコート？ やんことなき姫君のような扱いで、なんだか照れちやうね。

「兄上、この馬車で学園の入学式に行くのですか？ ちよつと、派手では？」

「いいから。遅刻してしまおうよ」

ニッコリと機嫌が良さそうな兄上を拒むことはできず、兄上の手に丸い手を^{プロ}と乗せた。

だけどね、十二歳のぼくはもう兄上の補助がなくとも馬車を乗り降りできるんだからね。今までお腹で足下が見えなくて怖かつたけど、時間をかけて克服し、つい最近になつて手摺りにしつかりとつかまれば乗り降りができるようになつたんだ。

でも兄上が補助してくれると、馬車に上がるときにふわっと引き上げてくれるから、空を飛ぶような感覚になつて気持ちいい。だからたまにお姫様気分でエスコートを受けるけど、それ以外はちゃんとひとりでできるもん。

そうして馬車に乗り、席に着いた。左隣に兄上が、そしてぼくらの対面にミケージャが座る。いつもの位置だ。

ミケージャが扉を閉めてコンコンと御者に合図を出すと、馬車はゆっくり動き出した。

では気持ちを新たに、いざ、ロンディウヌ学園へ！

馬車は内装もすっごく豪華だ。革張りの座面は座り心地が柔らかいし、壁や柱は飴色の艶のあるしつかりとした木材を使つた頑丈な作りだからか揺れも少ない。

大きな体格の兄上が座つても、天井も横幅もまだまだ余裕があるほど広くて……というか、兄上の脚ながーい！！ そんな兄上がスルリと脚を組んで座つてちょうどいいので、ぼくには座面がかかつた。足が床に届きません!!

しかしこの馬車では、王族が乗つてているというのがあからさまになつてしまつ。ぼくは王族だとう意識が薄いから、ちょっと氣後れしちゃうな。

「サリュ、こういうのは最初が肝心なのだ。先制パンチというやつだよ」

「先制パンチ、ですか？」

意味がわからず、ポヤッと見上げて首を傾げると、麗しい顔で兄上が笑つた。

魔王の三男である私の婚約者が、私に大事にされてご登校、ということを知らしめるためだ。子供会に来ていた高位貴族の子弟は、サリュにちよつかいを出したらひどい目に遭うと認識しているだろう。だが学園には、子供会に來ていなかつた低い身分の貴族の子弟や、優秀ではあるが王城のことによく知らない市井の子などもやつてくる。そういう者でもこの馬車を見れば、サリュがどういう立場にあるかひと目でわかるだろう

「……わかつたら、どうなるのですか？」

ピヨと再び首を傾げると、兄上はにやりと悪い顔で笑つた。

「サリュがあなどられることは少なくなる。まあ、公爵家のマルチエロやファウストがおまえをそばで守つてくれるから、そう愚かな真似はできませんが」

「ファウストが？ でも、ファウストはラーディン兄上のご学友ですよ？」

ファウストもマルチエロもぼくのお友達だけど、一学年上のファウストは、ラーディン兄上のご学友でもあった。

「ラーディンの学友だが、サリュの騎士だろう。本人もそう言つていた」

「確かに悪しき者の手からお守りいたしますと言われてはいますがあ……というか、兄上はいつの間にファウストとお話ししたのですか？」

それは初耳だった。ファウストが学園に入つてしまつたから、ぼくはここ一年ばかり会つていな
いというのに。ぼくのお友達なのに、兄上、ズルいい！

「ファウストとも、バッキヤス公爵とも話したよ。学園に入学したサリュをくれぐれもよろしくと
お願ひしたら、快く引き受けてくれた」

ファウストの生家であるバッキヤス家は騎士を率いる一門で、王族の守護が絶対という信念を持
つ家だから、次期魔王の兄上にそう言われたら引き受けるしかないと思う。

でもバッキヤス家はファウストを、ラーディンのそばにいさせたかったはず。

魔王の三男ではあるが、義理の息子で血脈なしツノなし魔力なしで旨味なしのぼくなんかより、
正統な血脉の第二王子であるラーディンと仲良くなつたほうが箔がつくのだ。

それに、レオンハルト兄上を守るお役目を目指すラーディンとバッキヤス家は、利害が一致して
いる。学園で仲良くなつた息子とラーディンが将来魔王となるレオンハルト兄上を守る。そのよう
な未来図を、バッキヤス公爵は予想していたのではないか？

「ぼくを守るお役目だなんて、ファウストやバッキヤス公爵はがつかりしたでしょうね」

「それは、自分の目で確かめなさい」

自信なくそう言うぼくに、上機嫌な兄上は上機嫌なまま答えた。

そんな話をしていたら、ロンディウヌス学園の校門が見えてきた。

手前に馬車専用のロータリーみたいなものがあり、高位貴族の馬車が渋滞を起こしている。今日
は入学式だから新入生のご両親もいっぱい来ているみたい。

でもぼくらの馬車はそこに並ばず、校門をくぐり学園の敷地に入つてしまつた。

「あ、兄上、ここは馬車が通つてもいいのですか？」

「ああ、今日は特別だ。私はサリュの父兄として出席するが、ドラベチカの後継が通学路を歩いた
ら騒ぎになるだろう。だから、講堂の入り口に馬車をつけるように事前に連絡があつたんだ」

すごい、学園長にそんなことを言われるなんて。さすが、兄上！

ぼくが驚嘆している間に馬車は学園の敷地を進み、校舎前を通り過ぎ、奥のほうにある講堂へ
向かう。到着した先では、ラーディンやマルチエロ、そして大人の人がいっぱい、レオンハルト兄
上とぼくを出迎えてくれた。

それだけではなく来年入学するはずのシュナイツとマリーベルもいて、その後ろには多くの見知
らぬ生徒たちがすずなりになつて興味津々でこちらを見ていた。

まずはミケージャが馬車から出て扉を支えると、兄上が黒い馬車から出る。すると、おおおおと
感嘆の声が上がつた。

でも兄上が生徒たちを睥睨する^{へいげい}と、打つて変わつて辺りはシンと静まり返つた。

すごい、これが魔力の多さや威厳で人を制するという、アレなのでしょうね？

六歳のお披露目パーティーのときに、父上である魔王のやんわりしたやつを見たけど、兄上のははじめて見た。

兄上はどんな顔をしているのでしょうか。でも兄上がぼくを振り返ったときには、もう柔らかい表情になっていた。

えええええ!? ぼくも兄上の睥睨する顔、見たーい!

きつとキリッとギンとしていて、眼光の鋭さに胸をギュンと貫かれるのでしょうかねっ！

まあでもとりあえず、ぼくも馬車を降ります。

差し出してくれた兄上の手にプロと手を重ね、ふわあと浮くように飛び、シユタツと着地する。うーん、兄上のエスコートはいつも最高に着地がしつくりきます。気持ちいいいい！

そうしてぼくは、ロンディウヌス学園での学生生活の第一歩を踏み出したのだつた。

なにやら遠くのほうから、丸い、丸い、とかすかに聞こえてくるけど……でもいいのだ。今日は入学式という晴れの日だからね。ちょっと失礼だけど怒りませんよ、ふふふ。

「leonhardt様、この度はサリエル様のご入学、おめでとうございます」

心の中でそんなことを思つていると、ぼくと兄上の前に大人の人が出てきて頭を下げた。どうやらロンディウヌス学園の学園長みたい。こめかみの辺りから上に伸びる青みがかつたツノ、そしてやんわり笑顔のおじさんは頭を上げて、兄上に話しかけた。

「leonhardt様がお育てになつたサリエル様は、わが校の試験でとても優秀な成績をおさめられ

ました。教師一同、感嘆しております。leonhardt様もわが校においでいただけたら、神童と呼ばれたことでしょう」

学園長が立て板に水のごとく、兄上に祝辞を述べていく。

入学の前に学力を見定めるための試験があつて、そのことを話しているみたい。

「どうか、ぼくを介して兄上を褒める技が秀逸です。学園長、すごい。」

「学園長、祝いの言葉をありがたく受け入れよう。私の婚約者であるサリエルが楽しい生活を送れるよう、見守つてもらいたい。大事な子なので、くれぐれもよろしく頼む」

兄上がぼくの肩に腕を回して学園長に言うと、やはり生徒たちがざわざわはじめた。

ぼくが兄上の婚約者だというのは、知る人ぞ知ること。はじめて聞く人も多いだろうから仕方がないけど……あの丸いのが、丸いのが……というのは失礼ですよ！ ふふふ。

そうしたらプロフと誰かが噴き出すのが聞こえた。魔王の次男で、ぼくの一歳上の兄上……いや、失礼な兄上こと、ラーディンだつ！！

「おまつ……白い制服はヤバいと思っていたが、やっぱり、白くてまあるい、ニワト——」

「ラーディン。兄として先輩として、おまえにサリエルを任せても良いのか？」

兄上は笑顔ながら、こめかみに怒りのマークを浮かべている。しかし、時すでに遅しだ。

生徒たちはもう、ニワトリ、ニワトリ……とこそそと言ひはじめてしまつた。

もうつ！ ラーディンのせいで陰でニワトリと呼ばれるのが確定しちゃつたよ。ムキイイツ!!

「はい、兄上。お任せください。サリエルのことは俺がしつかり守ります」

嘘つけえい、と心の中でツッコむ。

……うーむ。ラーディンにはどうしても言葉つかいが荒くなってしまうな。いけない、いけない。いつものほほんを取り戻さなければ。

「おまえの言葉や態度でサリエルの居心地が悪くなるようなことがあつたら、許さないからな」

「ラーディンは兄上に威圧され、身を縮こまらせた。反省してください。

「サリエル様、お久しぶりです」

ラーディンのそばにいたファウストが前に出てきて、ぼくの前で地面に膝をついた。

ファウストは大きいから、膝をついた状態のぼくがぼくと目がしつかり合う。いや、黒くて重たい前髪が目を隠していて、厳密には目は合っていないけど。

「どうか、制服が黒色です。みなさん白い制服なのに、ファウストはデザインは同じだけぼくらとは色違いの制服だった。特注なの? 制服の下に着るシャツも黒いスタンダードカラーで、髪色とマッチしてシユツとして見えるね。あ、ファウストの備考欄には『冷虐の黒騎士』って書いてあるから、きっとファウストは黒が好きなんだな? うむ。

彼は十三歳だけど、もう兄上と同じくらいの高身長なんだ。体が出来上がっている感じ、格好良いよね。ぼくなんかまだ成長途中で……いえ、成長はまだ止まってませんからつ。

「おはよう、ファウスト。一年ぶりだね。また、お友達としてよろしくね」

「ああ、サリエル様。ずいぶんと大きくなりましたねぇ。もうすぐ私の身長は抜かされそうです」「大きくなつたの、わかる? でもファウストを抜かすのは無理ですよお」

あははと笑い合うと、ラーディンは驚いたようにぼくらをみつめた。

「ファウストが笑つた。この一年、無愛想な顔で俺の後ろに突つ立つていただけのファウストが! 必要最低限の言葉しかしゃべらなかつた、あのファウストがつ? サリエルと談笑??」

「ファウストはラーディン兄上のようにがさつじやないのです。寡黙で思慮深いのですう」

ぼくの言葉に、ラーディンはケツと吐き捨てる。しかしファウストはさらりと彼を無視してぼくをみつめた。

「私はラーディン様のご学友ですが、この度レオンハルト様の命を受け、サリエル様の護衛に任じられました。学年が違うので始終おそばにいられるわけではありませんが、できうる限り守護させていただきます」

「話は聞いています。あの、本当に無理のないようにね。それにぼくたちはお友達なのだから、固くならず、気安く接してください。リラーックス

「もつたないお言葉です、サリエル様」

ファウストはぼくの手を取り、キスするフリだけして離す。そして立ち上がりると、ラーディンの後ろではなく、ぼくの後ろに立つた。

なんだか本当に騎士に守られているみたい。大事にされる感じがくすぐったいね。

「マリーベルたちがいないから、一年はサリーをひとり占めできると思ったのに、ファウストがいたか……」

マルチエロがぼくの耳元でこっそり言う。一番はじめにぼくのお友達になつたマルチエロは、親

しみをこめてぼくをサリーと呼ぶ。けれど兄上には許されていないから、こつそりなのだ。

「つていうか、今年の総代は私らしいのだけど、なんでサリージヤないのかな？」

「新入生のみなさんが、こんなぱっちやりを見たいと思いますう？ みなさん、白馬に乗った麗しの王子様を見たいのですよ。世間というのはそういうものです」

「私は白馬なんか持っていないし、王子でもないけど。むしろ王子はサリーでしょ」「似たようなものです。いえ、ビジュアルでは圧倒的にマルチエロが王子です！」

「えええ、面倒くさあ……」

「ぼくは入試問題を一問、解きませんでした。マルチエロが総代なのは全問正解したゆえの実力ですから、素晴らしいことです」

「ぼくがうなづくと、マルチエロは仕方がないなあと言つて、笑つた。

「パンちゃん、入学、おめでとう」

マルチエロが下がると、今度はマリーベルがお祝いしてくれた。

マリーベルはマルチエロの妹で、ミルクティーカラーの長い髪が印象的な令嬢だ。いつも華やかな笑みを浮かべている……のに、なんで泣いてるの？

「パンちやんが一年、子供会に来ないなんてえ……」

「泣くなよお、マリーベル。私も泣きたくなるじやないかあ」

マリーベルの隣で、シュナイツも目をウルウルさせていた。

シュナイツは魔王の四男で、マリーベルの婚約者だ。つまりぼくの弟なのだが、なんでかぼくをお嫁さんにしたいと言つて、ぼくと兄上の婚約破棄を虎視眈々と狙つていた。

つか、この場にいるぼくの知り合いはみなさん婚約破棄虎視眈々勢である。

「シュナイツはその気になればぼくに会いに来られるでしょう？ お隣なのだから」

距離は遠いけど、実質、兄上の屋敷の隣はシュナイツの屋敷だ。

「私が勝手にサリエル兄上にお会いして、それがマリーベルにバレたら、面倒くさいくらいに怒られるので」

「当たり前でしよう。抜け駆けは禁止だわ！」

マリーベルがそう言い放つたとき、兄上が口を開いた。

「おお、いい感じに婚約破棄虎視眈々勢が集まっているな。では今ここで宣言しておく。サリエルのお友達諸君、私がサリエルと婚約破棄することはない。ゆえに、サリエルのことは早々に諦めてもらいたい！」

「兄上、それは承服しかねます」

高らかな兄上の宣言に、一番に待つたをかけたのはラーディンだつた。

「サリエルが兄上との婚約を望まなくなるかもしません」

「ほう、ラーディン。この私に言うようになつたではないか」

兄上は、魔王と対峙したときより抑えてはいるが、ラーディンとバチバチに睨み合う。

「ストーップ、兄弟喧嘩はいけませえーーん」

ぼくは短い腕を伸ばしてふたりを制した。兄上と魔王のときはこれでおさめられたのだ。

「そうだね。次期魔王様のお言葉でも、サリエルを諦めるのは時期尚早かな」

しかしマルチエロが火に油を注ぎ、マリーベルたちも口々に「諦めない！」と言いはじめた。

兄上は額の御ツノを赤くして、ぶすくれてしまう。

「ぼくは兄上の腰にブヨッと抱きついで、こつそり言つた。

「兄上え、婚約破棄虎視眈々勢、恐ろしいでしよう？」

「ああ、私の言葉を公然と無視するとは、婚約破棄虎視眈々……は長いから、こいつらはもうコシタンで良いな。コシタンめ、一筋縄ではいかないな！」

ぼくと兄上の不愉快な気分が空気を重くする中、入学式の時間が迫ってきたことに気づいた学園長が口を挟んだことで、とりあえずこの場は散会になつた。

まだ入学式ははじまつてないというのに、なんだかドツと疲れました。

いろいろあつたけど、入学式のため生徒たちは学園の講堂へ赴いた。

インナーは講堂を映画館みたいだと言つた。一段高いところに舞台があつて、固定された椅子が並んでいる構造だが、インナーの世界にも似たようなものがあるんだなあ。

新入生は前方に座り、後方は家族と在校生の席だ。

「今年はレオが参列しているから、ひと目見たい者たちが大勢集まっているね。昨年もフードインが入学したから出席者は多かつたけれど、ここまでではなかつたつて聞いていいよ」

隣でマルチエロが解説してくれて、ぼくは顔を上げた。講堂の二階には高位貴族専用の貴賓席が

あり、そこに兄上がいるのだ。

貴賓席にはレオンハルト兄上、ラーディン、シュナイツ、さらに三大公爵家であるマルチエロのご家族がいて、こちらを見守つていた。

『あ、これ映画館なんて庶民のやつじやなくて、オペラ座の最上級観覧席だ。ゴージャスう！』

貴賓室内はえんじ色の分厚いカーテンで飾られていて、柱や手摺りの設えに緻密な彫刻が施されている。本当に豪華だね。

ぼくが見上げているのにマリーベルが気づいて、手を振ってきた。だからぼくも胸の前で小さく手を振る。えへへ、入学式つてなんだかドキドキそわそわだけど、家族に見守られていて、恥ずかしいというか照れくさいというか、そんな気分になるね。

そして、ようやく入学式がはじまつた。

学園長の言葉や在校生の祝いの言葉をいただき、そのあと総代であるマルチエロが舞台上に上がる。マルチエロが学園生活の抱負などを流麗に述べると、令嬢たちがキャーと反応した。

ね、やつぱり試験問題を一問解かないで正解だつたでしょ。令嬢はいつの時代も、ぽつちやり丸鶴ではなく、白馬に乗った王子様を御所望なのである。

そして、入学式は無事に終わつた。

その日の新入生は家族と帰宅してよいとのことで、ぼくは兄上と一緒に、あの豪華な馬車に乗つて屋敷に帰つたのだった。

★★★★★

一夜明けて、今日から本格的に学園生活がはじまる。

もう兄上と一緒に登校できないし、ミケージャもエリンもないから、完全にひとりになるのだけど、ううう、ちょっと心細いな……。でもこれが大人になるということなのだと、ぼくはまるい拳を握った。

意気揚々と玄関を出ると、車寄せにきらびやかな馬車が止まっていた。扉についているエンブレムはバッキヤス公爵家の紋だ。

「おはようございます、サリエル様」

馬車から黒い制服を着たファウストが颯爽^{さうそう}と降りてくる。ぼくがあんぐりと口を開けてファウストをみつめていると、後方から兄上がやってきた。

「学園内では大人の護衛をつけられないから、バッキヤスにサリュの送り迎えを頼んだのだ。授業中はマルチエロが、登下校時はファウストがサリュの警護をするから、サリュは必ずふたりのうちのどちらかを伴うようにしなさい」

「……わかりました」

王族が学校に通うのって大変なんだなあ、と他人事のように思ってしまう。ぼくはイマイチ王族という意識が薄いのだけど、とりあえずなぞいでおいた。

「サリエル様、うちの御者の顔をよく覚えておいてください。彼以外の馬車には決して乗らないようにお願いします」

ファウストが説明すると、御者^{ぎよしゃ}が降りてきてぼくの前で一礼する。

「え、これは誘拐対策？　いやいや、ぼくなんかを誘拐しても、なんにも出ないよ。ぼくが、魔王との血脉なしツノなし魔力なしの落ちこぼれ三男だつてことは、魔国の国民ならみなさんご存じだもの。でもこうして万全の対策をしてくれることは、とてもありがたいことだね。ちゃんと言われた通りにしよう。

そうしてぼくは、ファウストの馬車に乗りこんだ。

兄上がぼくを見送つてくれるので、窓から手を振つてそれに応える。

いつもぼくが兄上をお見送りしていたから変な気分だ。それに、馬車が動いて兄上の姿がどんどん遠ざかっていくのを見ていると、なにやら悲しくなつてしまふ。くすん。

馬車は家の敷地を出て、軽やかに進みはじめた。

そういえば、とふと思いつけて、隣に座るファウストを見上げる。

「ファウスト、送り迎えは兄上が無理を言つたのではないですか？　だとしたら——」

「まったく問題ございません。というか、最初はマルチエロがこの役目になりそだつたのですが、私がマルチエロは教室ですとサリエル様の御側にいられるのだからズルいと申し上げて、この御役目を勝ち取つたのでございますっ！！」

長い前髪で表情が見えないけど、被せ氣味かつ拳を握つて力説したので、嫌々従つてゐるわけで

はなさそうだ。

「ならないのだけど。ぼくを守る御役目だなんて、バツキヤス公爵やファウストはがつかりしませんでしたか？ もしそうなら、兄上に相談しますけど……」

「がつかりなど、するわけがありません。学生のうちから光榮な御役目を賜り、バツキヤス家一同喜んでおります。サリエル様に求婚してしまった私をレオンハルト様は寛大なことに許してください。さらにはサリエル様を御側で守護するよう命じてくださった。私は感無量でございます。レオンハルト様のお心に報いるため、命を賭してサリエル様をお守り申し上げます」

「固いよ、固いよ、ファウストお!! 一年会わなかつたら、こんなにカツチカチになっちゃつてえ。ぼくたちはお友達でしょ？ もつと気安くね」

ファウストは前髪から真剣な目をのぞかせて言い募つた。兄上は、ファウストがどう思つているかは自分で確かめなさいと言つていたけど、ファウストは全然がつかりなんかしていなゐみたい。きつと兄上は、無用な心配だつてわかつていただんだね。

「ぼくはホッとした。喜んでもらえたのなら、ぼくも嬉しい。

「あと、命は賭けなくていいからね。ゆるふわつと守つてくださいませ。でも気持ちは嬉しいよ、ありがとう、ファウスト」

ぼくがそう言うと、うなずきはしなかつたが、ファウストはそつと微笑んでくれた。
警護は仕事だ。ファウストは眞面目な性格だから、任せられたことをおろそかにできないのだろう。だからぼくの言葉にうなずくことはできなかつたのかも。

でもね、ファウストとはお友達だから、普段はお友達としてそばにいてくれて、いざというときだけゆるふわつと守つてくれたら、それでいいんだ。へへ、お友達とか言うの、なんか照れるね。魔王城は王都の一番高いところに建つてゐる。馬車はそこから王都の街に降りて、ロンディウヌス学園への道を進む。高台に建つてゐる学園へ通じる道は一本しかないから、学園に用のある者しかその道を使えないことになつてゐる。

ちなみに学園の敷地の裏手には、魔獸の住む森が広がつてゐる。でも、そんなに危なくはないらしい。学園には魔獸を狩る授業があるんだけど、その対策のために危ない魔獸は狩りつくされてゐるつて、マルチエロが言つてゐた。

とにかく、裏手側からは誰も入れないから、一本道だというわけ。

王都から高台にある学園への道を上つていくと、ロンディウヌス学園の校門が見えてくる。

昨日は講堂の前に馬車をつけたが、今日はちゃんとロータリーに並んで降車の順番を待つ。降車所に着いてファウストと一緒に馬車を降りると、すでにマルチエロが待つてゐた。

「おはよう、サリー。今日から毎日サリーの顔を見られると思うと、嬉しくてならないよ。泣き濡れた妹の顔を見たから、さらに気分爽快だ」

「お兄ちゃんなんだから、妹に優しくしてあげてください」

彼の言葉で、マリーベルはまだグズッているのだとわかる。昨日も、飛び級で入学するつて騒いで大変だつた。

そうして、右にマルチエロ、左少し後ろにファウストが並ぶという新たな布陣で、ぼくらは教室

に向かつた。

姿勢の良い高身長で、黒々とした長い髪、とても涼々しい顔貌である、騎士っぽいファウスト。小顔の八頭身で上品なたたずまい、キラキラ金髪で緑の瞳の王子様っぽいマルチエロ。

そんな彼らに挟まれた、白くて丸くて赤いトサカの、ニワトリっぽいぼく。

やつぱり目立っちゃうのだろう。令嬢がひそひそ、貴族の子弟がコソコソ、ぼくらを見ながらなにかを言つている。

「一日目だから仕方がないけど、ウザいねえ」

爽やかな笑顔で、マルチエロが毒を吐いた。

「直接、失礼なことを言つてきたら、斬つて捨てます」

「ダメです。穩便にお願いしますよ」

ファウストもボソリと怖いことを言うので、すかさず訂正した。みなさん、仲良くしてえ！大勢の視線にさらされながら一年生の教室に到着すると、ファウストは膝をついてぼくと視線を合わせた。

「サリエル様、なるべくお待たせしないようにはいたしましたが、もしも私のほうが授業の終了が遅くても、教室から出ずマルチエロとともに過ごしてください。ひとりで帰ろうとなさってはいけませんよ」

ファウストの忠告に、うなづく。そこで、ファウストは一年生なのに、一年生の教室までぼくを送つてくれたんだと気づいた。

「わかりました、おとなしく待っています。だからファウストも、遅くなつても慌てないようになります。ちゃんと最後まで授業を受けてくださいね」

「ありがたいお言葉。もしも予期せぬ事態が起きましたら、すぐにお知らせください。飛んでまいります」

教室に入ったぼくを見届けたファウストは、一礼して、その場を去つた。

そのファウストの後ろ姿を、令嬢が扉から見送つてキャッキャ言つてゐる。

「黒騎士様だわあ、格好良いわね」

そうでしょう？ ファウストは素敵だものねえ。寡黙な騎士は格好良いのだ。ぼくは令嬢の気持ちが少しだけわかる気がする、むふん。

教室はすり鉢状になつていて、生徒が座るすべての席から教師と黒板が見られるようになつてゐる。席は百席くらいあつて、机も椅子も頑丈で上等そうだ。さすが貴族の子弟が集まる由緒ある名門校なだけあって、教室の柱ひとつとっても歴史を感じる。

マルチエロが席を探して階段を三段くらい登つたので、ぼくも彼について行く。

「サリエル・ドラベチカ」

するといきなり不躾に名前を呼ばれた。聞いたことのない声だ。

振り返ると、いかにも上級生といった体格のいい人たちが一年の教室に数人入つてきた。新一年生たちは落ち着きなくざわめきはじめる。

上級生っぽい彼らがまっすぐにぼくをめがけてやってきたので、マルチエロが前に出てかばつて

くれた。

「王族の名を随分居丈高に呼ばわるが、あなた方は何者だ？ ファウストが離れたのを見計らつてから教室に入つてくるような腰抜けの知人などいないが」

普段は温厚なマルチエロだが、言葉にトゲを感じる。だが上級生はそれに動じず言つた。

「おまえに用はない。そつちのデブに用がある」

はああああつ?? 今までぼつちやりで濁していたのに、はつきりデブつて言いやがりましたよお!?

カチンときた。ラーディンに怒つて以来のオコです!!

「おい、おまえ。レオンハルト様との婚約を辞退しろっ」

ヤギのように後ろに伸びる太いツノを持つ上級生。襟が紫色だから最上級生だな。なかなかイケメンの上級生は、目を吊り上げて怒ついていて迫力がある。

いえ、怒りたいのはぼくのほうですけどお？ つか、ずいぶん唐突だね。

「貴様、自分がなにを言つているのかわかつてゐるのか？ サリー……サリエル様は王族だ。貴様のその振る舞いは不敬と見なされてもおかしくないぞ」

「この者は魔王様の血脉ではないのだから、王族ではない。知つてゐるぞ、サキュバスの連れ子とかいう下級悪魔。本来、この由緒正しきロンディウヌス学園に足を踏み入れられるはずのない小物だ。ツノも生えていないじゃないか。貧相で醜いなあ」

わあ、あからさまにぼくを見下しているね。ここまで悪意をぼくにぶつけるのは、この頃は

「ディエンヌくらいだつたから、驚きと感嘆で二の句が継げません。

「なにも言い返せないということは、頭も弱いのだろう。とにかく、おまえはレオンハルト様に相応しくない」

ぼくを指さして上級生は言い切る。そして一転して、夢見るような顔をした。

「見たか、昨日の貴賓席にいらした、あの神々しいお姿を。あのように高貴で美麗で威厳に満ち満ちたお方のそばに、こんなどこもかしこもゆるんだ醜い豚がいるのは許しがたい。……ああ、なぜレオンハルト様の周りの者はお諫めしないのだ？ 私が仕えていたら、このような目が痛くなるような異物をそばに近づけさせやしないのに」

どうやらこの上級生は、綺麗なもの至上主義のようだね。美しいものしか認めない、そういう人が身内にいたからわかる。

綺麗なものが好き、それ自体はいいのだ。兄上が神々しいお姿のもそうだし、ぼくも綺麗とかキラキラとか可愛いものが好きだからね。

でも、それ以外のものを頭ごなしに否定し中傷するのはいけません。そういう価値観がすべての人にとってはまるわけではあるのだから。

もちろんぼくも悲しくなります。どこもかしこもゆるんだ醜い豚、か。思わずぼくは手でお腹をポヨンと揺さぶつた。

「その勘違いもはなはだしい汚い口を閉じろ、バフオメット伯爵子息」

名乗つていないのでマルチエロが家名を言い当てたからか、彼は目をみはつた。でも、ヤギのツ

ノと似たツノを持つのはバフォメット家の特徴なのだ。将来ぼくらは兄上の仕事を手伝いたいので、魔王に連なる貴族やその特徴はすべて網羅している。兄上の配下になり得る者だからだ。とはいっても、まずは名乗つて挨拶するのが礼儀。あと、身分が上の者に下の者から話しかけてはいけません。

あ、エドガーを思い出しちゃうね。ぼくに早く声をかけると、いつも怒っていたつけ。

ぼくは一応魔王の三男なので、この学園ではラーディンの次に格が高い令息ということになる。学園生活はなるべく無礼講でいくつもりだけ、仮にも魔王の三男だから、不躾に呼び捨てられるのはスルーできないな。別にぼくは良いけど、ドラベチカ家があなどられる王族の権威が揺らぐのでね。

ぼくがむすつとしていると、マルチエロが高潔ながらも鬼気迫る様子で続けた。

「レオンハルト様はこの方に膝をついて求婚したのだ。表面的なものしか見えていないおまえのような者が『私が仕えていたら』だと？ 片腹痛い。傑物であるサリエル様と比べたら、おまえは羽虫だ」

「はあ？ この丸いのが傑物？ なにを馬鹿なことを……レオンハルト様が学園に入学なさつていたら私がご学友になつたはずなのだ。そうしたらこのような者は近寄らせらず、レオンハルト様に相応しい御令嬢や、もしくは私が、婚約者になつたはずだ」

「はんっ、話にならないな。レオンハルト様は顔や容姿などに惑わされないからこそ賢君なのだ。彼は従兄弟の私でも、役立たずならば斬つて捨てる非情な男だぞ。おまえはきっと、レオンハルト

様をぼーっと見ているだけの愚鈍な男なのだろう。三大公爵家後継たる私を軽んじるくらいだからな。あまつさえ次期魔王の婚約者に牙をむくとは……そのような輩やからがレオンハルト様に仕えるなど、できるわけがない！」

本当はぼくが怒らなければいけないのに、マルチエロが怒つて全部言っちゃつてる。口を挟む隙すらないよ。

「たとえサリエル様が婚約者でなくとも、たとえレオンハルト様が学園に通つておられたとしても、おまえが友に選ばれることは決してなかつたはずだ。わかつたら、その勘違いを引っこめて我々の前に二度と現れるなつ」

勢いよく啖呵を切つて、すつきりと決まりました。すごい。格好良い、マルチエロお!!

しかし、バフォメット伯爵子息は呆然としたのもつかの間、全身をブルブルと震わせはじめた。「くそっ、こんな大勢の前で辱められるとは、なんたる侮辱！ こんなデブのせいであつ、こいつがいるせいでえつ!!」

彼は怒りに任せて魔力を練り合わせると、ぼくに投げつけた。

すると、ぼくの宝石の防御魔法が発動——するまでもなく、ぼくの周りに綺麗な薄青のガラスのようなバリアが展開し、彼の魔法は弾かれた。

そしていつの間にか、バフォメット伯爵子息の前に、先ほど別れたはずのファウストがいた。「レオンハルト様が寵愛なさつてている婚約者を守る者が私たちふたりしかいないとでも思つたか？」

そう思つことこそ浅はかだ。バフォメット伯爵家は、子弟の教育を怠つたばかりに御家取り潰しに

なりそうだな。残念なことだ」

高身長のファウストがバフオメット伯爵子息を見下ろしてつぶやく。その言葉は彼に恐れを与えたようだ。

「ま、待て。聞いてくれ」

「私に言つても仕方がない。この顛末はすぐにレオンハルト様の耳に入るだろう。レオンハルト様の目はどこにでもあるのだと、皆も、肝に銘じることだ!!」

ファウストが言い切る前に、バフオメット伯爵子息の取り巻きたちが脱兎のごとく教室から逃げ出した。息巻いていたバフオメット伯爵子息を置き去りにして。

そしてバフオメット伯爵子息も顔面蒼白になつて教室を出て行つた。

「逃げたところで、事を起こしたことに変わりはない。処分を逃れられるわけがないのにな」

前髪の隙間からギラリとした切れ長の目が見えた。騎士様の迫力、すごい！

「もう、サリーは。入学早々問題を起こすのだからあ」

マルチエロは張りつめた空気をさらりと流して、爽やかに笑いかけてくる。え？ これってぼくのせい？ ま、いいか。

「マルチエロ、あのバリアすごかつたね。綺麗なガラスみたいで、魔法をバンと弾いて、格好良かつた！」

「ああ、あれは私だけじゃないよ。サリーのすぐそばだけじゃなくて、あちこちに展開した違う？ ファウストが言つたように、レオが置いた影のおかげだろうね」

影とはいつたい誰なのかと教室をぐるりと見やるが、みなさん顔を横に振る。

「はは、すぐにわかるようじや、影失格だよ」

「憶測です。いると思うが、誰かは知りませんから」

マルチエロの言葉に続いて、ファウストもうなずいた。え、憶測なの？ じゃあ、いないかもしれないんじやん。ま、いいか。知らないていいことは世の中にはいろいろあるからね。

「ファウストもすごいね！ ホントに飛んできた。でも、戻つてこさせちゃつてごめんね」

「お気になさらず。あなたに怪我がなくて良かったです」

ファウストがぼくの手をニギニギするそばで、マルチエロがさらつと告げた。

「ファウスト、サリーが怪我をしたら、死、だよ。あとサリーの例の宝石の防御魔法が発動したら、我々は御役御免だからな」

「……そうなのか。いえ、大丈夫です。発動させませんから」

ファウストは抑揚のない声でそうつぶやくと、おもむろに教室から出て行つた。

教室内はシーンと静まり返つている。なんかいろいろあつて、みなさんもどつと疲れたような顔をしているけど……まだ授業ははじまつていませんよ。

氣を取り直してぼくとマルチエロは今度こそ窓際の席に座る。けれど、今度は教室がざわざわソワソワしあげはじめて、全然落ち着かない。

あああ……今的一件で、ぼくの友達はマルチエロオンリーになつた氣がするな。だって、兄上のこととか御家取り漬しどうか聞いたら、怖くて近寄れないでしょ？

もう、バフォメットくん、きらーい!!

★★★★★

入学初日から、なんでか上級生に絡まれてしまつたけど、そのあとは特に大きな事件はなく、ぼくは平和な学園生活をエンジョイしていた。

……とは言うものの……

「研究機関の調査によると、私たちが住むこの大地はかつて隕石の飛来によって焼け野原と……」歴史の先生が教科書片手にこの世界の成り立ちを教えてくれるのだが、それはいわゆる創世記に書かれている内容だ。魔族の子なら、幼少期に親に読み聞かせをしてもらうようなポピュラーな本だから、みなさん退屈して眠そうな目をしている。

特に瞬間記憶能力を持つぼくは、本で読んだものや人々の台詞などもすべて覚えているので、教科書をなぞられると本当に退屈なのだ。これから座学授業のすべての時間、今の同級生たちと同じような眠たげな目つきで先生をみつめることになりそう。

でも座学以外にも実習というものがあつて、これが楽しみだつたりする。

ぼくには魔力がほぼないので魔法の授業は落ちこぼれそうだけど、剣術はファウストに教えてもらつたからなんとかなりそう。

ついで膝立ちで対峙するファウストの体勢を崩すことができなかつたけど、騎士団の団長が、い

つ騎士になつてもいいと言つているファウストはプロフェッショナルなもの。ぼくは太刀打ちできなくて当然なのだ。でもその彼に教えてもらつたところが、キモなのです！

二年生になると、学園の裏にある森で魔獣を狩る授業があるから、そこでぼくの腕前を披露するつもりだ。むふーん。

そして剣術の他にも、淑女教育というものもある。男子は別にこの科目を受けなくともいいのだけど、ぼくは次期魔王と目される兄上の婚約者なので、学校側から淑女教育を受けてくださいと指示があった。

いいですよ、ぼく、淑女教育は自信あります。ダンスやお茶会での礼儀作法、おもてなしの仕方、紅茶の淹れ方などなど、令嬢が学ぶものはひととおり身につけているからね。

ダンスの先生にも『軽やかな妖精がお花の上で舞つているようなステップですよ』と褒められたことがあるんだ。

ディエンヌのドレスビリビリ期に培つた裁縫のスキルにより、刺繡ししゅうもプロ級の腕前だしね。

魔法は駄目だけど、淑女教育の科目で無双するからトントンでチャラなのだ。

今日の淑女教育の授業はダンスだ。ぼくはもちいと背筋をそらし、調子に乗つて足先も伸ばす。でも将来ぼくが兄上とダンスを踊るには、身長が圧倒的に足りないんだよね。ぼくの身長は今、兄上のウエストまでしかないからバランスが悪すぎる。だけどこればかりはどうにもならない……つか、ぼくはもつちりすら克服できないのだから、困っちゃうね。

本当なら兄上はもう社交界デビューの年なのだ。でもぼくはまだ兄上と上手に踊ることはできな

い。ダンスの相手をいっぱい待たせてしまうかもしれませんね。

早く大きくなりたい！でも、ぼくは育ち盛りだから大丈夫。身長はまだ伸びます。ここ六年ばかり育ち盛りを主張してはいるが、まだ、たぶん、伸びる……はず！！

そして淑女教育の授業が終わると、令嬢が寄つてくるようになりました。

「刺繍のコツを教えていただきたいわあ」

「あのダンスのターンは、どのようにすれば綺麗に見えますの？」

「うちの領でとれた美味い紅茶を、今度召し上がつていただきたいわあ」

などなど。バフォメット伯爵子息の一件で新しいお友達はできないかもつて思つていたけれど、令嬢が気安く接してくれるのは嬉しい。

「サリー。御令嬢たちは、次期魔王妃の君と懇意にしたいんだからね」

などとマルチエロは水を差すけど、いいのぉ！下心があつても、優しくしてくれるのは大事にしたいものなのですうつ！

少し夢を見させてください!!

そんな生活を送りつつ六月になり、ついに入学式のときに頼んでいた絵が出来上がった。

縦三メートル、横二メートルの、とても大きな絵だ。桜の花びらが舞う中で、黒馬に乗つたぼくと兄上が優しい顔で微笑み合つている場面。

額装はハリハリトゲトゲした模様が黒と金でグネグネしていて、なにやらまがまがしくて豪華で

派手なもの。だけど、それ込みで絵画は超大作になつたのだ。

その絵はエントランスの階段横にバーレンと飾られた。お客様の目に必ず留まるすつごく目立つ場所だから、ちょっとだけ恥ずかしい……でも兄上は格好良いから、兄上だけは絶対に見てください。

壁に飾られた絵を見ながら、ぼくは絵師さんに御礼を言う。

「こんなに素敵に描いてくださつて、ありがとうございました。でも、兄上の相手がもつと可愛らしいお姫様だつたら、もつともつと綺麗な絵になつたのでしょうかね」

兄上は言うに及ばず美男子で麗しい。でも、付け合わせのぼくがこんななので、絵師さんは可憐な少女を隣に並べたかったのではないかと思つてしまつたのだ。

でも絵師さんはゆつくりとかぶりを振つた。

「とんでもありません。レオンハルト様のあの表情を引き出すことができるのは、サリエル様だけです。サリエル様とレオンハルト様が仲睦まじく並んだからこそ、ここまでの大作ができたのでございますよ」

お世辞でも嬉しくて、照れてしまふ。

兄上がぼくを見て、この絵のように穂やかで優しい顔でいつも笑つてくれるなら、それ以上の喜びはないよね。なら、まあいいか。

そして夕方になつて、兄上が屋敷に帰つてきた。

「ああ、立派な絵ができたな」

絵を見てそう言つてくれたのが嬉しくて、ぼくは兄上の腰にぽよんと思いつきり抱きついた。

「おかえりなさいませえ、兄上っ！」

「ははっ、元気だな、サリュ。昨日も可愛かつたが、今日も可愛いとは何事だあ」

兄上はぼくの体を抱き上げ、支えるように手を回すと、ぼくを見下ろして笑いかけた。

『ぎやあああ、これは、駅弁の体位いいい!?』

ああ、インナーがエロ知識を叫んで失神してしまった。もうっ！ 兄上にはそういう気はまるで

ないというのに……はしたなくて、すみませえん。

「サリュ……あの絵のように、私にいつも春風のような可愛らしい笑みを見せておくれ」

そう言つて、兄上はぼくのおでこにおでこを当てて、グリグリする。至近距離で美形が過ぎる顔でそんなことを言われたら、インナージャなくともドキドキしてしまうよ。

兄上の長い藍色の髪が、ぼくの頬をさらりとくすぐる。まつ毛も長いから、瞬きをする音が聞こえてきそうだ。それくらい近いんですう！ 顔がのぼせて目がグルグルになりそう。

でも兄上が望むから、ぼくはエヘッと笑つた。兄上にも笑つてほしいのだ。

そんなふうに、ゆるやかで、温かで、ちょっとこそばゆい日々が過ぎていく。

……いつまでも、こんな日が続いたらいいのだけどねえ。



三月三日は、ぼくの誕生日。サリエルは十三歳になりました。ヒューヒュー。

魔国には雪が降つたり一気に冷え込んだりする冬はないけど、肌寒くなる時期はある。もうすぐ暖かくなる時期だから昼間は温かい日も増えてきたけど、夜はまだコートくらい着ないと寒いね。

だけどぼくはもつちりだから、厚着をすると着ぶくれしてさらに丸くなる。むうう……

そんなぼくはと、今兄上とともに魔王城の庭園広場中央にある噴水の前にいます。

三角屋根の塔がいっぱい建ち並ぶ魔王城は夜になるとランプがいっぱい灯されて、ライトアップしている。そして噴水の周りにもいっぱいのランプが設置されていて、色のついた水が出ると噴水の周りの石畳まで色づいて、とても綺麗だった。

ただでさえ着ぶくれするというのに、白いファーの襟飾りのせいで短い首が埋もれて丸みに磨きがかかるつているぼくは、噴水の前にあるベンチに兄上と並んで座つていた。

兄上は、黒い衣装に黒マントというスマートな出で立ちだ。なにを着ても兄上は格好良くて、うらやましいなあ。兄上も噴水もとても美しいから、ぼくはあちこちに視線を移して、ほうつと感嘆のため息を漏らした。

「綺麗ですねえ。いつまでも見ていられますねえ」

この噴水は、兄上がぼくと一緒に噴水を見たいからと作ったものなんだつて。お遊びのために噴水を作るなんて、驚いてしまうね。

ぼくも、パズルを作ったときはみなさん喜んでくれたけど、兄上に負けないくらい大きなものを作らないといけないな。……今は、考えつきませんけど。

とにかくぼくは、キラキラの水の粒をおとなしく見守っていた。だつて、はしゃいで水の妖精さんの邪魔をしたら……また噴水が壊れてしまうかもしませんからね！

以前に行つた街のときみたいに、兄上の作った噴水を水ブシャーにするわけにはいきません。「この噴水ができた初日に来たときは、大勢の人がいてデートなどできなかつたからな。いつかサリュと、こうしてゆつくり噴水デートをしてみたかったのだ」

兄上は優しい顔つきで、ぼくにそう言つた。

「デート……!?

「そうか、これはデートなんだよね。その言葉の響きに、ぼくはドッキドキであるう！」

今日は誕生日だから、屋敷では御馳走をお腹いっぱい食べた。今日だけは、インナーもダイエットつて言わないから、ケーキもいっぱい食べちゃつたあ。

お誕生日プレゼントには、兄上は色とりどりの糸のセットをくれた。百色もあるし、どの色もとても素敵で、飽きずに何時間でも見ていられるくらいなのだ。学園の淑女教育で刺繡しじゅうを作る授業があつて、それがきっかけで刺繡にハマっているんだけど、兄上はそのことを知つていたみたい。

「今度私にも、なにか作つてくれると嬉しいな」

兄上がそう言つてくれたので、素人芸ながら兄上になにか差し上げよう、なんて考えた。手作りのものを贈るときつて、それを考へるだけでなんだか胸の奥がくすぐつたくなるね。

それだけでも嬉しかつたのに。兄上とふたりきりでこうして幻想的な景色の中でデートだなんて、夢のようだ。

まあ、厳密にはふたりきりではない。兄上は魔国の重要人物なので、護衛は離れたところながらあちこちにいるし、ミケージャもエリンもいる。

雰囲気ですよ。この世界にふたりきり、という恋人フィルターです。

「こここ、恋人……は言ひすぎましたかね？」いえ、ぼくは婚約者だからいいのだ！

「すごいですね、兄上。木の向こうのほうまでライトアップしたのですか？」

噴水の向こうにある公園の木々、さらにその向こう側もオレンジ色に染まつっていた。夜だからライトアップが映えるなあ、なんて考えたのだけど……

「いや？ ライトアップはこの周辺だけだ」

「え、そうなのですか？ でも、あちらのほうが明るいですよ？」

「……火事かもしれないな」

兄上はそうつぶやくと、そばにいた警護のひとりに様子を見に行くよう指示を出した。でもぼくはなんだかとつても嫌な予感がして、兄上に言つた。

「兄上、ぼくらも行きましょう」

「いや、大丈夫だろう。火事だとしても使用人が対処する」

「でも、の方角にはディエンヌの屋敷があるので。ぼくはとても不安です」

「……つ、せつかくのサリュとのデートだつたというのにつ」

兄上は、オコです。ブンスカです。でも美麗な顔でブンスカは、逆に可愛いです。

「申し訳ありません、兄上」

「いいや、許さぬ。では、これからは空中ランデブーだ」

兄上はマントを外してエリンに渡すと、大きな羽を背中から出した。片羽が兄上の身長と同じくらいの大きさの、コウモリみたいな翼だ。兄上が羽を出すのを最後に見たのはぼくが五歳くらいのときだけど、そのときよりもすっごく大きく立派になつた。

兄上はぼくを両手で抱きかかえると、翼を羽ばたかせ空を飛んだ。冷たい空気が頬に当たる。「寒くないか？」

「平気です」

「なにもなかつたら、デート続行だからな」

「はい。ありがとうございます！」

ぼくは兄上にしがみついて、キュッと頬に頬をつけた。風は冷たいけど、ぼくのもつちりほつペをつけていれば温かいでしよう？

デートに水を差されて兄上はさつきまでオコだつたけど、今はなんだか楽しそうに空を飛んでいる。機嫌が直つて良かつたです。

噴水のあつた広場から、兄上とぼくはディエンヌが住む後宮に向かつて飛んでいる。林の向こうに見えた明るい光が迫つてきて……ぼくは落胆してしまつた。

……ああ、なにもなればいいと思つていたのに……

ディエンヌが住む屋敷が燃えていたのだ。やはり悪い予感というのは当たつてしまふものだね。二階建ての洋館の飾り窓から炎のオレンジ色が瞬いて、火の粉が夜の空を赤く染めている。

外に避難しているディエンヌは、その光景を見ながらなぜか高笑いしていた。

「おーっほつほつ、命が消えゆく炎の、なんて美しいことかしらあ？」

うわっ、性格がゆがんでいるのは知つていたけど、命が消えゆく炎なんて、すっごく不吉なワード。それを楽しそうに言う彼女の心もちが本当に理解できない。

ぼくと兄上は上空を飛びながらディエンヌの大きな独り言を聞いた。そしてぼくは兄上に、屋敷の周りを飛ぶよう頼んだ。

「ディエンヌの話しぶりだと、逃げ遅れている人がいるのかもしれません。あああ、兄上、あそこ!! あそこに人影が見えます!!」

最悪の想像が当たらなければいいと思いながらも屋敷の中を観察していると、人影が見えた。でもその人影は、なぜか炎のほうへ走つているようだ。

滑空していた兄上は屋敷の裏にある草原に降りると、ぼくを地面に降ろした。

「兄上、あの人を助けてくれますか？」

「ああ。だが……ここにサリュをひとりで置いていくのは気掛かりだ」

「大丈夫です。おとなしくここにいます。兄上にもらつた宝石も持つておりますよ」

安心させるように、ぼくはコートの襟につけた赤い宝石を指で撫でる。だから、お願ひ。早くあの人を助けてあげて。そんな気持ちで兄上をみつめた。

「すぐに戻る。ここを動くな」

そう言って、兄上は炎が燃え盛る屋敷の中に、水魔法をまといながら飛んで行った。

兄上もどうかご無事で。ぼくは手を^{プヨ}と組み合させて、神様に祈った。

この世界の神様は、大地に根づく精霊^{だつたり}、古びた建物だつたり、名もない神や女神^{といふ}曖昧^{あいまい}なものだつたり、天使だつたり、ときには魔王だつたりする。でもなんでもいい、誰でもいいから、兄上と屋敷の中にいるあの人を、どうかお守りください。

力のないぼくは、一生懸命祈ることしかできなかつた。

そのとき、ぼくの宝石から警報音がブビーと鳴つた。

辺りを見回すと、ゆっくりした足取りでディエンヌがこちらにやつってきた。

「あらあ、サリエルう。どうしてこんなところにひとりでいるのかしらあ？」

どうしてつてディエンヌは、ぼくらが上空を飛んでいたのを見てここに来たのだろうに。と心の中でツッコむが、それをこの高飛車な妹に言う気はない。だつて絶対三倍返しにされるもん。

「火事が見えたから駆けつけたんだ。ディエンヌ、君は魔力があるのだから消火活動をしなきやダメだろう？」

「うるさいわねえ。お説教とか聞かないわよ。でもちようどいいわあ。火事に巻きこまれて、あんたも死んじやえбаあ？」

そう言つて、彼女は火の玉をぼくに向かつて投げつけた。しかし宝石の防御結界が発動してぼくの前にバリアが現れ、火の玉は弾かれる。

あわわ、燃えカスが草原に落ちて、草が燃えちやつた。

「こんなことをしている場合じやないだろう！ 逃げ遅れた人を屋敷の中でみつけたんだ。今、兄

上が救助している。屋敷の主人として使用人の安否を確認するべきだ」

「はあつ？ なに、余計なことをしてくれてんのよつ！ ホント、いつも私の邪魔ばかりするんだから！ 大体あんたは存在自体が邪魔なのよ。お母様もいつも言つていたわ、あんたを身ごもらなければ、どこへだつて行けた。私はもつと自由だつた。誰の子かわからないあんたさえいなければ、魔王妃として迎えられたかもしれないのに、つてね」

すつごい言いがかりで、ぼくの眉間にムニュムニュ動いた。

「ぼくを身ごもつたのは、ぼくのせいではないでしょ。それに魔王様には正妻のマーシャ^は義母^は上^はがすでにいたのだから、魔王妃になるだなんて普通に考えて無理です」

「知らないわよ、お母様が毎日そう言つていたの。ぶつぶつと、ウザいんだから。つか、あんたも相当ウザいのよつ」

そう言つて、彼女はまた火の玉を投げてきた。八つ当たりにもほどがある。

でもそれは水の渦で弾かれた。ぼくを守つてくれたのは……レオンハルト兄上^はだあ！！

兄上は片腕で救出した女性を抱えていた。額に十センチくらいのツノがある薄茶の髪色の女性は、いわゆるメイド服ではなく、簡素ながら上品な紺色のドレスを身につけている。

息はあるようだがぐつたりとしている女性を、兄上は優しく地面に横たえた。
「ディエンヌ。詳しいことはあとでじつくり聞かせてもらうが、これ以上サリュに手を出すなら、今ここで消し炭にしてやるが？」

兄上にギンと睨まれ、ディエンヌは不機嫌そうに腕を組んだ。赤色の眉を怒りでぴくぴくさせて